

「確かな学力」をつけるために 「言葉の力」を どう育てるか

兵庫教育大学学長・中央教育審議会副会長

梶田 叡一

今回の新学習指導要領(平成20年3月告示)では、「確かな学力」を育てるためには、「言葉の力」が大事であるとしています。この「言葉の力」をどう育てるか、梶田叡一先生に具体的な方法についてご指導いただきました。

「言葉の力」は、 基礎的な学習能力

新学習指導要領は、「確かな学力」を育成し、それを通じて「生きる力」を養うことを目指しています。勉強と縁のないところではなく、勉強を通じて「力」を土台とした「生きる力」ということです。そして、その「確かな学力」の土台になるのが「言葉の力」なのです。「言葉の力」がきちんと身につけていないと、勉強もできません。最も基礎的な学習能力は、「言葉の力」

なのです。

「言葉の力」は「伝え合い」というコミュニケーション能力として考えられがちですが、ここでいう「言葉の力」は単にそれだけのものではありません。コミュニケーション以前に、その根底となる認識・思考・判断が「言葉の力」によって成立するわけです。忘れてはいけないことは、この認識・思考・判断の力こそが、基礎的な学習能力であり、これを通じてしか「確かな学力」は形成されないということなのです。そういう力を土台にしないと本当の「生きる力」も育たないのです。こ

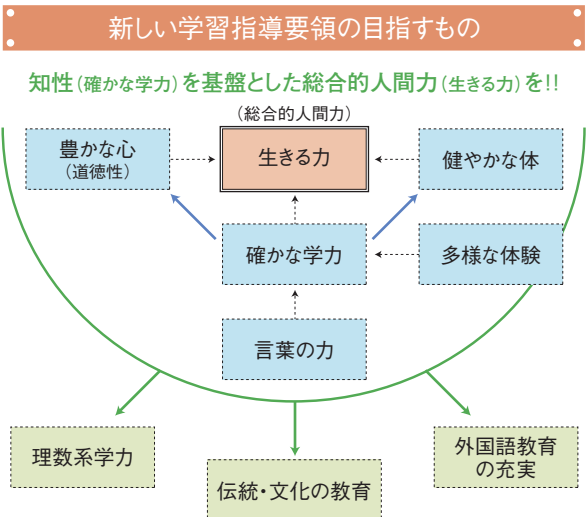
をしつかりとらえなければなりません。

「言葉の力」を駆使して学ぶ。それが実を結んで「確かな学力」が身につく。それによって「生きる力」がついてくる。そうした教育の過程の土台に「言葉の力」があるのです。これこそまさに、教育のあり方として不易のものであると思います。



梶田 叡一

かじた えいいち*1941年松江市生まれ、米子市で育つ。京都大学文学部哲学科卒業。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長などを経て、現職。文学博士。



「言葉の力」を、 どう指導するか

では、「言葉の力」をどうしたら身につけることができるのでしょうか。

方法 1

言葉や物語に

まず関心をもち、

出会いをもつこと

小学校に入る前の、あるいは小学校低学年の「読み聞かせ」には、とても意味があります。「読み聞かせ」によって、子ど

もたちは、どんどん言葉に目覚めていき、言葉で構成されて形づくられていく世界、物語の世界に引き込まれていきます。興味のある言葉や物語に関心をもち、できるだけ数多く出会うことが大事です。

方法 2

「読み聞かせ」を土台に
自分で本を読むこと

「読み聞かせ」の次は、簡単なものでよいから、自分なりに本を読むことです。

多くの学校では「朝読書」など、いろいろな方法で読書の習慣づけをしていますが、基本は学校に新しいピカピカのおもしろそうな本を数多くそろえておくことです。何かの折に子どもが本を手に取り、ちよつと読み始めてその本に引き込まれる。それによって読書の習慣が身についていくのです。

方法 3

言葉そのものを
豊かにすること

小さいころ、子どもはこの言葉はどういう意味かなと、言葉にこだわります。でも、そのま

まにしておくとコミュニケーションの用が足りればそれでいいということ、子どもは安易なところで安心してしまいます。

同じことでも、親と話すときと友だちと話すときでは、言葉が違ってきます。いろいろな言い方があることにも気づかせたいものです。

例えば、小さい子どもが「きかない」という言葉を覚えます。「バッチイ」という言葉も覚えます。「きたない」という言葉を2つの言い方があることを2歳半くらいから覚えていきます。

「バッチイ」は、子ども同士で使います。あるいは、大人が子どもにわかりやすく話すときにわざと使います。基本的に子どもも言葉です。「きたない」はあらためて言う、あるいは大人に言う場合に使います。

このように言葉は、相手や時・場所によって使い方が違います。子どもでも、そのことを感じています。いろいろな言葉を一通り覚えて一応の伝え合いができればよいというわけではありません。何通りも使い方を覚え

ていくことが大事です。

親が子どもの話し相手になりたり、先生も子どもの話し相手になったり、子ども同士で話し合ったりすることを奨励したいものです。日本では、「寡黙がいい」という考えがありますが、言葉を覚えていくためには言葉数が多くないとはいけません。できるだけ話し合う機会をもち、言葉を豊かにすることです。

方法 4

言葉の使い方を
正確にしていこう

小学校低学年から辞書を引いたり、辞書で確かめたりする習慣をつけていくことも大切です。

何気なく使っている言葉を、辞書ではどう説明されているのか、本来はどんな意味なのか、ときどき自分で確かめるようにします。同時に先生や親に尋ねてみることもやらせたいものです。先生や親を辞書代わりに使うわけですが、これもまた大事なことです。教科書に出ている言葉がど



ういうふうに使われているかも確かめさせたいものです。教科書の中に出てくる文章の中で、その言葉がどういう意味をもっているのがわかってくる。これが正確な使い方につながっていくのです。

方法 5
ひとつの言葉から
いろんなイメージを
膨らませる訓練をすること

例えば、「たまご」という言葉で考えさせます。

「今日、給食でたまご料理が出たね。たまごからどんなことを思いうかべるのかな」と、まず自分で考えさせます。

たまごから小さいものを連想します。たまごから鳥のことを思います。たまごから白身と黄身を思います。たまごは栄養があつて、体にとつてもいいことを考えます。このように、子どもが自分ひとりでイメージを広げていきます。

子ども同士で話し合つていく、「ブレインストーミング」の方法もあります。ひとつの言葉から思いつくものをグループで、

業をすることが思考するといふことです。

もともとの認識の世界が豊かでない豊か思考はできません。判断も、豊かな認識、豊かな思考に支えられたものでなければ、単純化された浅薄な判断になってしまいます。

確かに、最終的な判断は、いいか悪いか、正しいか正しくないかといった二値的なものになるかもしれませんが、その最終判断にどれだけ豊かな土台をもっているかが問題です。

これをよいとすると、その理由はこうだ。これをよいとすると、こういう問題が残る。こういう判断の深みが大切です。あるいは、最終判断に至る前に、これらの選択肢のどちらがいいだろうかという検討の深みがあるかもしれません。

例えば、選択肢aにはメリットやデメリットがこれだけある。選

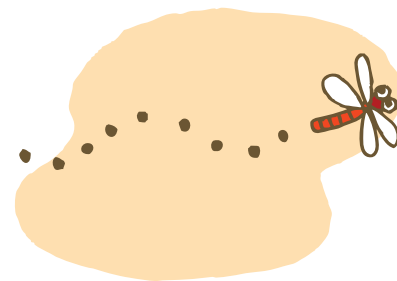
クラス全体でどんどん出していきます。そうすると、自分ひとりで考えるよりイメージが大きくなることに気づきます。

こうしたことをときどき試してみると、言葉のもつイメージの広がりが見えてきます。

方法 6
詩・俳句などの
文学的な言葉に
関心をもたせること

例えば、童謡「あかたんぼ」で考えさせます。

「ゆうやけの 赤たんぼ おわれてみたのは いつの日か
「ゆうやけ」と「赤たんぼ」をいっしょに取り上げているのは、どうしてだろう。「赤」が共通しているからだろうか。ゆうや



けで真っ赤になった空に赤たんぼが飛んでいった情景をきれいだと感じたのだろうか。こんなふうには、作品がはらむ豊かなイメージの世界を読み取り、その世界を受け止めていく練習をしていくのです。

そのためには、子どもたちがピンとくるような詩や俳句などを、先生や親が準備しておくことです。童謡や小学校唱歌などを見直してみるのもよいでしょう。金子みすずの詩のように、小学生にもわかるイメージ豊かな文学的世界をつくらせているものもあります。このように、子どもが関心をもちそうな詩などをいろいろと取り上げていくことも大事な方法です。

**豊かな「言葉の力」は
豊かな認識力**

小学校でできそうな6つの「方法」をあげてみました。これらをうまく取り入れた指導を考えていきたいと思います。

どの学年でも、6つの方法は役立ちます。素材をどう選ぶか、

だけでなく、あらゆる教育の場面で言葉の教育を実施していかなければならないのです。

言葉の教育は、算数の時間でも大切です。まず、算数の大事な言葉を理解させ、数量的な処理の仕方を覚えさせなくてはなりません。その上で応用問題が解けるようにしていきます。

特に応用問題では、物語の中に数量関係がどういう形で埋め込まれているかを、言葉を整理してとらえていく必要があります。これまで習ったどの解き方をどう適用すればこういう解答が出てくるのか、ということも考えていく必要があります。このように、算数においても言葉の指導が不可欠なのです。

もちろん、理科、社会など、他の教科でも同じことが言えます。教科ごとの特徴はありますが、「言葉の力」をつける指導が根底にあることを念頭に置かなければなりません。こうしたことについて十分な認識をもって取り組むことが、本当の意味での「豊かな学力」の育成につながっていくのです。

● 平成21・22年度の移行期の指導計画作成に役立つ ●

わかる移行措置 算数 理科 追加単元及び追加内容

算数・理科の移行措置はこの1冊でOK!
10月下旬発行予定

単元の展開例と評価規準

A4判 96頁 2色 定価1,400円
企画・編集 ぶんけい教育研究所
発行 株式会社文溪堂

● 付録CD-ROM:学校の指導計画に合わせてデータの書き換えができます。

大会
テーマ

「新学習指導要領とこれからの教育

……… 確かな学力は、教師の確かな学びから ………

主催 | 財団法人総合初等教育研究所・授業実践フォーラム 後援 | 文部科学省他 協賛 | 株式会社文溪堂

平成20年5月31日(土)・6月1日(日)に第16回授業実践フォーラムを、羽島市文化センター(岐阜県)で開催しました。今回は東海3県を中心に全国から約400名の先生が参加され、大会テーマである「新学習指導要領とこれからの教育」について、その概要や理念、課題、そして授業改善のための提案など、3つの講演と10の講座が催され、熱のこもった議論が交わされました。

講演

- 新しい学習指導要領の確実な定着に向けて

合田 哲雄 先生 文部科学省初等中等教育局教育課程課
教育課程企画室長



- 新学習指導要領の目指すもの

梶田 叡一 先生 兵庫教育大学学長
中央教育審議会副会長

- 確かな学力を育てる指導と評価のあり方

加藤 明 先生 京都ノートルダム女子大学教授
中央教育審議会専門委員

講座

授業実践講座

- 国語 新学習指導要領「国語」改善のポイント
- 理科 理解を深める活用授業の組み方
- 生活・総合 新学習指導要領の読み取りと授業づくり
- 自然観察 「身近な自然の観察」の指導の仕方
- 算数 算数授業で育てる「表現力」とは何か
- 社会 新学習指導要領の新内容への挑戦
- 道徳 これからの道徳と人権教育の創造
- 英語 「担任教師が創る小学校英語教育」

学校経営講座

- 新しい教育課程 確かな学力の定着を目指した異校種間連携の推進
- 学校評価・学校づくり 学力向上と学校評価



講座の様子

第12回 教育セミナー 開催案内

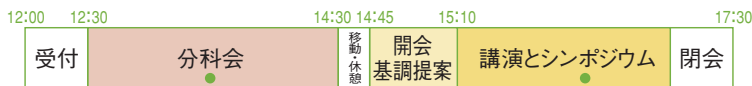
大会
テーマ

「新教育課程の実現と授業改善」

主催 | 財団法人総合初等教育研究所 後援 | 文部科学省 協賛 | 株式会社文溪堂

日時 平成21年2月21日(土) 12:30~17:30

会場 国立オリンピック記念青少年総合センター



分科会

国語科・社会科・算数科・
理科・道徳

講演とシンポジウム

コーディネーター 筑波大学大学院准教授/清水 静海先生

シンポジスト 広島大学大学院教授/角屋 重樹先生
国士舘大学教授/北 俊夫先生
東京都港区立青南小学校校長/奥水 かおり先生
文部科学省初等中等教育局教育課程課長/高橋 道和先生

※テーマ・シンポジウム登壇者は予定です。



明日の実践に
つながる
教育セミナー